

ハインリヒ・ヴォルガストの児童文学批判

—— 世紀転換期*ドイツにおける読書教育をめぐる ——

吉 本 篤 子

1. はじめに

1.1. 本論文の課題

本論文では、ドイツの民衆学校教員ハインリヒ・ヴォルガスト(1860-1920)の読書教育論を検討する。ヴォルガストは、19世紀と20世紀の世紀転換期に活動した、ドイツの児童書運動のさきがけとして知られる人物である¹⁾。今日、「子どもの活字離れ」や「有害図書」の規制問題²⁾等の様々な議論が行われているが、児童の人間形成における読書の意味を根本的に問い、またそのための社会的実践を行った人物として、ヴォルガストを歴史的に位置づけ、その今日的意味を問うことは重要な課題となろう。

本稿では、まず世紀転換期の子どもの読書をめぐる議論を整理したうえで、ヴォルガストの読書教育論の意義を確認する。その上で、とりわけこれまでヴォルガストに向けられていた「抑圧的」、「禁止教育学」であるという批判の妥当性を再検討することを目的としたい。そのための前提として、本論文では、彼の著書『我が国の児童文学の惨状』〔“*Das Elend unserer Jugendliteratur*” 1896年刊行、以下『惨状』と略記する〕をはじめとする世紀転換期の彼の著作と論考を中心に、当時の子どもの読書をめぐる状況に対して彼がどのような読書教育論を導きだしたのかを明らかにしたい。

1.2. 研究史概観

本論に入る前に、研究史を概観しておこう。ハインリヒ・ヴォルガストは、ドイツにおいて、長年、国語教育の創成期における読書教育の中心的人物として評価され、研究されてきた。近年でも、ウィルケンディング、ブリュッゲマン、エーヴァース、ダーレンドルフらによってヴォルガスト研究が進められている。どの先行研究でも、ヴォルガストの読書教育論が当時の時代状況に大きな影響を与えたという評価は一致している。ヴォルガストによる読書教育

論の「論争的書物」である『惨状』の出版によって、子どもに対する文学教育の意義が自覚され、議論されることになった〔Dahrendorf 1980: 80〕。また、『惨状』のような読書教育論を著しただけでなく、児童書運動として推薦書リストの作成や廉価本の編集といった活動を展開したこともあり、彼の議論は非常に広範に影響を及ぼした。他方で、ドイツの先行研究におけるヴォルガストの読書教育論研究の一系列として、ヴォルガストの議論は子どもの自由な読書を抑圧する「禁止教育学である」という見方がある〔Wilkending 2002, Dahrendorf 1980〕。ウィルケンディングは、良書を選別するヴォルガストの議論を批判した一方で、彼やハンブルク民衆学校教員らの書籍市場への実際的な働きかけを評価している〔Wilkending 2001〕。しかし、彼女を含め、総じて近年の研究動向は、ヴォルガストの読書教育論が子どもの読書の自由を損なうものであるという批判的評価が主流であったと見てよい〔Dahrendorf 1980, Brüggemann 1976 (1962), Ewers 1996〕。

日本におけるヴォルガスト研究は主として、ハンブルクの民衆学校教員による改革教育運動の議論の中で取り上げるか、あるいは芸術教育運動の主要人物の一人として概説的に紹介することが多かった²⁾。本稿のめざす、ヴォルガストの読書教育論そのものを本格的にとりあげた研究はこれまでなかったと見てよい。

こうした状況の下で、本稿は可能な限りヴォルガストの立場に内在することによって、従来の解釈に対し、もう一つの別の見方を提示することを課題とする。そのためには、彼が子どもの読書をめぐる問題状況の中で、いかなる問題意識をもって時代状況をとらえ、著作を含め活発な理論的活動と社会的実践を行ったのかを検討する必要がある。

このような観点に立って、本稿は具体的には、まず子どもの読書を巡る時代状況を取り上げ、次いでそうした状況に対してヴォルガストら民衆学校教員

がどのように対応したのかを整理する。加えて、ヴォルガストが理論的活動にとどまらず、どのように実践的に対応したのかを検討する。こうした分析を通して、ヴォルガストの個別的主張を彼の読書教育論の基本的枠組みの中に位置づけることによって、彼の提言をより内在的にとらえたい。

2. 世紀転換期における児童の読書をめぐる状況

2.1. 初等教育制度の充実化と書籍市場の発展

ドイツでは19世紀を通じて初等教育制度が整い、世紀転換期にはほぼすべての子どもが初等教育を受けられるようになった³⁾。この時期、教育を受けたことのない民衆層の親の子どもたちが初めて教育を受けることになる。

また、書籍市場においても大きな変化があった。18世紀以後、印刷状況の改善により、書籍の市場は徐々に拡大し、読者数も増大していた。19世紀後半以後、ドイツ統一後の経済的発展と教育制度の確立によってさらに読者数は拡大し、出版産業は急速に繁栄した。大人の文学だけでなく子どもの読物の市場も拡大し、大出版社も児童文学に力を入れるようになる。大きな娯楽文学出版社のうち児童書に特化するものもあらわれた。このことから⁴⁾、児童が文学の消費者と認識されていたことは明らかである。なかでも当時、子ども向けに改作された冒険文学、愛国主義的な物語文学、少女のために書かれた一ジャンルである「小娘文学」や「少女文学」といった分野が成功をおさめ、子どもたちに広く読まれていた⁵⁾。

2.2. 子どもの読書機会

以上のような、初等教育制度の充実化と書籍市場の発展の帰結として、子どもの読書機会は増大したが、ヴォルガストが読書教育の際に念頭においた民衆層の子どもたちにとりわけ好んで読まれたのは、「インディアン物語」⁶⁾や「少女文学」といったジャンルの通俗文学だった。

エンゲルジングによれば、1890年代初頭のドイツとオーストリアで、通俗文学を販売していた書籍行商人の手を通して小説を読んでいた人々は約2000万人であった。また、雑誌類を含めた書籍生産量は、1889年に17986点、1900年に24792点、1910年に31281

点と、急激に上昇している。「インディアン物語」の作家として知られるカール・マイの著作は、1914年までに160万部出版された作品もあるほどの人気を集めた⁷⁾。また、少女文学の売れっ子作家クレメンティーヌ・ヘルムは、版ごとに3500部出版される契約を出版社と結んでいる⁸⁾。このように、通俗文学の市場は世紀転換期に著しく拡大していた。通俗文学の市場拡大と、児童文学の市場拡大との関連とは深く結びついていたのである。

以上のように大量の子ども向けの書物が、しかも廉価で出版されるようになると、新しい問題が生まれてきた。出版社は児童書を売るために、子どもの関心をひきそうな本を次から次へと発売するので、その中からどの本を選べばよいのかがすでに問題だったし、子どもに本を選ばせるとなると、インディアン物語のような通俗読み物ばかりが売れるということになりがちであり、教育者の立場からすれば悪書が良書を追いやるように思われた。こうして、子どもたちのために「何を、いかに読ませるか」すなわち、読書教育が学校教育の課題となっていた。

3. 民衆学校教員の対応

世紀転換期に通俗文学の出版数が著しく増大し、民衆層の子どもに好んで読まれていたことは、教育者にとって好ましくない状況であった。19世紀後半以後、民衆学校教員は、教員組合活動を中心に、「何を、いかに読ませるか」という課題に積極的に取り組んだだけでなく、子どもの読書環境を問題視し、その整備のために活動した。その活動は、とりわけハンブルクで盛んであった。ハンブルクの民衆学校教員によるそうした一連の教育改革にかかわる活動は「ハンブルク運動」とも呼ばれている(表1)。ハンブルクの民衆学校教員たちは、児童書委員会を設立し、児童に読ませるべき本を検討した。また、彼らが中心となり、書籍商や愛国協会〔Patriotische Gesellschaft〕⁹⁾などと、どのような本が児童に望ましいのかについて論争がおこなわれた。一連の運動の中心人物とみなされ、論争の際しばしば名指して攻撃されたのが、ヴォルガストである。

表1 ハンブルク運動関連年表

西暦	活動
1873	ハンブルク民衆学校教員組合 (VHV) 設立
1888	VHVにおいて児童書委員会が設立される (議長はフリッツ・フォン・ボーステル、ヴォルガストは創設メンバーに含まれる)
1893	ライプツィヒのドイツ教員大会で11の地域の検査委員会がドイツ児童書検査委員会連合 (VPA) と統合される 『児童書の守護者』(『守護者』) が会の機関誌として創設される (中央部局はベルリン、創設メンバーにハンブルク委員会も含まれる)
1894	ヴォルガストの論文「絵本とイラストレーション」(“ <i>Vom Kinderbuch</i> ” に収録) に対して反論がおこり、ハンブルク運動と書籍出版業間の論争が始まる
1896	VPA中央部局がベルリンからハンブルクに移る (ヴォルガストが『守護者』編集長になる) 学校における芸術教育促進教員連盟(Lehrervereinigung zur Pflege der Künstlerischen Bildung) 結成
1899	ハンブルク運動とハンブルク・アルトナー書籍連合によって代表されるハンブルク書籍商との論争 (1897年クリスマス前に出された『守護者』の付録の推薦書リストを、ハンブルク愛国協会が批判する)
1904/5	ハンブルク運動とハンブルク書籍商との論争 (ハンブルク検査委員会メンバーが、社会主義的とされる芸術育成協会や社会主義的書籍商とともにクリスマス展を実施することがきっかけとなる)
1910	ハンブルク運動と著者、出版業者、書籍商間の論争

4. ヴォルガストの読書教育論の問題関心

4.1. ヴォルガストの読書教育論に関する活動

ヴォルガストは、1860年生まれハンブルクの民衆学校教員である(表2)。ヴォルガストは教員養成学校に通った¹⁰⁾後、教員試験を受け、ハンブルクの孤児院や民衆学校で教歴を積んだ。彼の活動は民衆学校教員としての経歴にとどまらない。教員組合の様々な委員会での活動、とりわけ読書教育、文学教育関連の活動や執筆活動などを通して行われた¹¹⁾。具体的には、理論的活動として『惨状』などの執筆を行い、実践的には子どもに望ましい本を選定する雑誌『児童書の守護者』[“Jugendschriften- warte”] (以下『守護者』と略記する)¹²⁾や良書を廉価で提供する『源泉』[“Quellen. Bücher zur Freude und zur Förderung.”]シリーズの編者として、世紀転換期の読書教育に関する議論にもっとも影響を及ぼした人物として知られている¹³⁾。このようにヴォルガストは、子どもの読む本が出版社のイニシアティブで決められている当時の状況に危機意識を抱き、自ら積極的に子どもに好ましいと思う書物を選別し、またそれらの本を安く提供しようと活動した¹⁴⁾。ヴォル

ガストの考えは、大量販売を目指す出版社や子どもの「自由」を尊重する立場からの批判を招くことになった [Wilkending 2001, Dahrendorf 1980]。

4.2. ヴォルガスト読書教育論の目的

——文芸的(美的)享受能力の形成——

こうした批判をめぐる論点を取り上げるに先立ち、以下、本稿の主題にかかわる限りで、ヴォルガストの読書教育論の内容にふれておこう。ヴォルガストは、読書教育の目的を、文芸的(美的)享受能力 [dichterische (ästhetische) Genußfähigkeit] の育成にみている。彼の読書教育論にとってこの「文芸的(美的)享受能力」は非常に重要な概念であり、詳細な説明と検討を必要とするが、本論文では、ごく簡単に触れるにとどめざるをえない。

ヴォルガストは「文芸的(美的)享受」ということばを、同じ意味の「美的関心」あるいは「芸術的享受」など、いくつかのことばで言い換えて説明している。文芸的(美的)享受能力は、読書教育の過程で身につけられるべき目的とされる。享受能力は、芸術教育のもっとも重要な部分であり [EJ: 41]、基本となるものであった。

表2 ハイน์リヒ・ヴォルガスト (1860-1920) 関連年表

西暦	
1860	イエルスペク (ハンブルク郊外、シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州) に生まれる
1878-1881	教員養成学校に通う 教員試験を受ける
1886-1895	ハンブルクの孤児院で教え、のちに、ハンブルク民衆学校で教える
1886-1893	VHVの幹部を務め、同連盟解散後は、ハンブルクの「祖国の学校制度および教育制度友の会」[Gesellschaft der Freunde des vaterländischen Schul- und Erziehungswesens] の様々な委員会に属する
1888	VHVにおいて設立された「児童書委員会」(1893年、ドイツ児童書検査委員会連合と統合される) の創設メンバーを務める
1896-1912	ドイツ児童書検査委員会連合機関誌“Jugendchriften- Warte” (『守護者』) の編集責任者を務める
1896	『我が国の児童文学の惨状』[“Das Elend unserer Jugendliteratur”] 出版
1899	『惨状』第2版出版 『人形つかいボーレ』[“Pole Poppenspüler”] の付言を書く
1903	『教育に対する芸術の意義』[“Die Bedeutung der Kunst für die Erziehung”] 出版 『昔からの、美しい子どもの詩』[“Schöne alte Kinderreime”] 出版
1903-1909	ハンブルク民衆学校の学校会議 [Schulsynode] の代表者を務め、左翼的な民衆学校教員の要求や、統一学校制度や自治、宗教・信条の自由などに賛成する
1905	『惨状』第3版出版
1906	『子どもの本について』[“Vom Kinderbuch”] 出版
1910	『全体的人間』[“Ganze Menschen”] 出版
1911	『惨状』第4、5版出版 (反響に対する応答である「付録」の章を追加)
1918	教員活動が認められてハンブルク教育評議会の議長に選出される
1920	没
1922	『惨状』第6版出版
1950	『惨状』第7版出版 (解説・索引を追加)
2010	『惨状』初版のリプリント出版 (Nobu Press、Kessinger Publishing)

では、享受能力は、いかに形成されるのであろうか。享受能力形成の過程は、読書の世界の深まりとして理解されている。「文芸的享受の文化はおそらく芸術教育のもっとも重要な部分である」[EJ: 41]と述べるヴォルガストにとって、読書教育は美的教育の一環をなすものであった。ヴォルガストは、享受能力の形成過程を、「素材的関心」と「形式的関心」の関係から説明している。

「子どもに美的な喜びを目覚めさせることが問題であるということを見無視してはならない。 […]子どもは本来純粋に素材的な関心をもって

いる。子どもは、素材への喜びだけをもつ。そこから、とりわけ形式への喜びであるところの美的関心は、教育によって発達されるべきである。」[EJ: 36]

子どもは本来「素材的関心」をもっている。本の素材(題材)の新しさ、刺激の強さは子どもの関心をかきたてる。素材のおもしろさに頼っている本は好ましくないが、素材のおもしろさ自体は否定されていない。ヴォルガストにとって教育の役割は「素材的関心」を「形式への関心」に変えることにある。「形式への喜びであるところの美的関心」とも言われ

ており、「形式への喜び」と「美的関心」は同じ意味で用いられる。

では一体なぜ「形式への関心」なり「美的関心」は読書教育において追求されるべき目的とされるのか。この点についてヴォルガストは二つの教育目標を挙げている。そうした関心の育成は「真理に対する感覚」を目覚めさせると同時に、「認識能力」を成長させもする [EJ: 48]。読書教育の目的は読書によって「素材的関心」の「形式への関心」への変革を実現し、そのことによって「認識能力」や「真理への感覚」を育成することにある [EJ: 36] というのがヴォルガストの見方であった。

「美的な喜びは素材への喜びと、主としてそれが物事の真理と本質への喜びであるということによって区別される。[...]ここでは、芸術の世界と野蛮の世界の、二つの世界が分離される。素材的な関心はできごとからできごとへとせわしなく起こり、できごとは非日常性の、並外れたことの度合いにしたがって評価される。美的関心はより控えめである。できごとは、描写の誠実さと鋭さにおいてみ、その関心をひきつける[...]。性格描写の誠実さ、「人生」、描写された人間の完成度が、喜びを目覚めさせる。ここで確認されるのは、結局のところ真理に対する感覚なのである。」 [EJ: 36f.]

ところで、そうだとでも「形式への関心」はどのような意味で子どもの「認識能力」や「真理への感覚」を高めることになるのか。同じ体験（素材）であっても、それをリアリティを感じさせるように描ける場合もあれば、そうでない場合もある。体験の含みもつ現実に対応した形式をもつ文学作品はリアリティを感じさせ、素材は無理なく形式と一体化している。素材にふさわしい形式を感じ取る能力が「形式への関心」であり「美的享受能力」でもある。読書によって養われるとされる「認識能力」や「真理への感覚」は、科学的意味での真理や認識ではなく、素材が適切に組み込まれるべき形式を認識する能力なのである。

ここで、素材と形式の関係について改めて確認しよう。文学作品は素材を表現する形式をもっている。ところが、ある種の児童書、つまりヴォルガストが「偽の文学」と呼ぶいわゆる俗悪文学は、あらゆる素

材にはそれ固有の形式があるということを見逃しているとして、批判されることになる [PL: 12]。たとえば、「コガネムシの成長を劇の形式で、あるいは化学的なプロセスを叙情詩の形式で表現することは馬鹿げている」 [EJ: 21] とヴォルガストは述べている。それと同様に、歴史や道徳を小説という形式で表現することは馬鹿げている [EJ: 21] として、彼は傾向文学を退けるのである。

素材が適切に組み込まれるべき形式を認識する能力を形成するには、「児童に、彼らの文芸的(文学的)趣味を形成するため、あるいは、同じことだが、文芸的な喜びの力を彼らに与えるために、本物の文芸作品を享受させなければならない。[...]文芸的形式の児童書は、芸術作品でなければならない。[Die Jugendschrift in dichterischer Form muß ein Kunstwerk sein.]」 [EJ: 23f.] とヴォルガストは述べている。文芸的(文学的)趣味の形成、つまり享受能力を育成するには、子どもに「本物の文学作品」を享受させなければならない。児童書とはいえ芸術作品でなければならないというのがヴォルガストの主張である。

一方で彼は、読書教育における学校の課題が「我が国の著作という貴重な宝から生徒が自発的にその一部を身につける性向や能力を装備させることである」 [EJ: 10] と述べ、こうした能力は享受能力を身につけることで形成される、と考えていた。読書教育によって、「人生において生徒に押し寄せる多数の読書素材を自分に有益に用いることができるようにする能力」 [EJ: 17] の形成をめざしていたのである。

4.3. 児童のための良質な読書環境の形成

以上、読書教育の目的としての享受能力の形成についてヴォルガストがどう考えているのかを述べてきた。次に、享受能力形成のための実際的な課題としてヴォルガストが何を主張したのかを確認したい。その際、そうした課題の阻害要因として彼が何を念頭に置いていたのか、という問題を取り上げることにする。

「三文文士の駄作、あるいは、傾向書の教訓的で道徳的、宗教的、あるいは政治的議論を提供するような本を、児童の読書から厳しく閉め出すべきである。」 [EJ: 23f.]

上に引用したように、ヴォルガストは美的享受能力の形成を阻害するものとして、「三文文士の駄作」、いわゆる通俗文学のなかでも、とりわけ「娯楽文学」と、「傾向文学」を批判し、子どもから遠ざけようとし、子どもの読書環境を整えようとした。その二つの文学の問題点をヴォルガストはどのように考えていたのだろうか。

(1) 娯楽文学批判

ヴォルガストは、享受能力の形成を阻害するものを子どもの読書環境から取り除くことを主張した。そこで彼は、通俗（俗悪）文学として、「娯楽文学」と「傾向文学」を徹底的に批判した。

彼が批判した娯楽文学の代表的なものとしては、先に述べたような「インディアン物語」や、「小娘文学」「少女文学」がある。これらはときどき、「通俗小説」（あるいは「行商人小説」、「廉価大衆小説」）と一括されることもある。

通俗文学についても、その素材（題材）〔Stoff〕およびその取扱い方、つまり素材と形式の関係が問題にされる。先にもふれたように、文学作品にはそれぞれ素材（題材）があり、それぞれの素材にはそれにふさわしい形式があるとヴォルガストは考えている。しかし、「読書熱¹⁵⁾への最強の刺激を含むような娯楽本の読書は、非常に低級な精神的活動に慣れさせ、文学作品の価値評価の基準を過らせるようになる」〔PL: 11〕という。

ヴォルガストが批判するのは、刺激が強いもの、劇的なもの、びっくりするようなもの、おもしろそうなもの、そういった娯楽文学の素材である。

では、なぜそうした素材の文芸作品を読んではいけないのだろうか。

「インディアン物語や行商人ロマンの作者は確かに素材の関心をあてにしている。この思惑の達人が現在ではカール・マイである。彼らは、素材を渴望する精神が現実にあらゆる理性的なコントロールを断念していることを知っており、読者に対し次から次へおいしそうな食物を提供している。」〔VK: 20〕

刺激の強い素材は、ここで、「おいしそうな食物」にたとえられている。子どもを魅了する刺激的な素材（題材）の本は、その刺激の強さゆえ子どもの感

性を鈍らせる、という。素材の刺激が強すぎると一面では子どもは読書に熱中するようになる（そのこと自体必ずしも好ましいことではないが）、他面で、子どもは「途方もないもの」や「大げさな表現」になじんでしまい、刺激的でない素材の書物を読んでも読者はその本に関心をもてなくなり、読書も「効果を急ぐもの」になってしまうという問題がある。そして「細密な描写は読み飛ばされるか、評価されないか」になってしまう〔EJ: 43〕。

また、娯楽文学のように素材に頼り、しかも素材があまりに刺激的だと、過度な読書への熱狂を招き、空想世界に遊び、現実感覚が鈍り、形式への関心は衰弱し、すぐれた書物の享受能力の形成が阻害される点に問題がある、とヴォルガストは主張している。

(2) 「傾向文学」批判

「傾向」文学批判は、ヴォルガストの独自の議論である。傾向書といえば、通常は特定の政治的、イデオロギー的内容の強化や宣伝を目的とする書物を意味するが、ヴォルガストは「傾向」をより広義に用いており、傾向文学とは、「宗教的、愛国主義的、道徳的傾向をもつ」〔EJ: 44〕文学を指している。文学の形式をとりながらも、そうしたある特定の傾向をもち、読むことによって子どもが教訓を得ることを目的にした文学一般をヴォルガストは「傾向文学」と呼んでいる。児童のための良書を推薦するというと、とかく道徳的な本を選ぶと思いがちだが、そうした書物もヴォルガストは「傾向」書として退けているという点を確認しておきたい。ヴォルガストは、以下のように従来の児童文学を批判する。

「児童文学を初めて生み出した18世紀の汎愛主義者たちは、子どもの精神を啓蒙し、洗練化しようとしたし、前世紀〔18世紀〕中期のあのホフマンやニーリッツ¹⁶⁾は、現実的に教育し、道徳的、宗教的に影響を及ぼそうとした。そして新しいドイツ帝国の児童書の作者は愛国的に教育しようとしている。児童文学は常に傾向文学であり、時にはより道徳的で、時にはより教育的で、時にはより宗教的で、時にはより愛国主義的であった。すなわち児童に文学の享受をもたらす、あるいはその享受のために児童を教育するという児童文学のごく自然な課題を、児童向けの著述は全く意識していなかった。」〔EJ:

児童書はこれまで常に傾向文学であった、とヴォルガストは考えている。それは、現実的に教育するという名目で、啓蒙し洗練化するような、「教化」を目的としているという意味で「傾向」的であるということである。では、「傾向」文学の読書にどのような問題点があるとヴォルガストは考えているのだろうか。なぜ「傾向」があってはいけないのだろうか。

「あらゆる理性的なコントロールを放棄する同じような精神状態をあてにしているのが倫理的、宗教的、政治的な傾向文学者たちである。傾向文学は、人生に対する見通し＝展望に、右や左に覆いをかけてしまう。目標によって、すなわち、ここでは素材によって目くらましをされた視線は、途上のあらゆる宝を、しかし途上のあらゆる喜びも失ってしまった。」[VK: 20]

ここには、ヴォルガストの考えが端的に示されているといってよい。すなわち、傾向文学を読むと、読者はその傾向の強弱から文学の良し悪しを判断するようになる。道徳的な文学を読めば、より道徳的な傾向の強い本をより良い本と感じ、政治的な文学を読めば、より政治的な傾向の強い本をより良い本と感じる。また、倫理的物語を読めば、問題の善し悪しを倫理的観点から考察することが規範になってしまい、倫理的充足感のみが追求される [VK: 11]。だがそういう感じ方は、文学作品を道徳や政治に矮小化している。そうした状態は「理性的なコントロールを放棄した精神状態」に他ならない。芸術や文学が、道徳や宗教、愛国主義的主張に還元されない独自の領域であるとヴォルガストは考えており、ここにおいてのみ享受能力は育成される、と主張しているのである。

またヴォルガストは、児童読者が文学作品の中に示された様々な傾向に慣れることによって、彼らの「現実感覚と素材で単純な真理に対する感情」が殺されてしまう危険がある、と警告している [PL: 13]。このような、「理性的コントロールを放棄した」精神状態、あるいは「現実感覚や単純な真理に対する感情」を殺した状態が、美的享受能力の形成を阻害するものであると、ヴォルガストは考えている。

文学作品は道徳的傾向や政治的傾向の如何によっ

て評価されてはならず、たとえ児童書であってもあくまで文学作品として評価されねばならない¹⁷⁾。様々な傾向に還元されない文学作品独自の領域は、先に述べた素材の形式化によって形成された領域であり、文学作品は素材と形式の関係、素材がいかに適切に形式へと組み込まれているかによって判断されるべきである、とヴォルガストは考えている。傾向文学の読書では、獲得されるべき認識能力がまったく働かない、つまり作品の享受能力も形成されない、という点に問題があるというわけである。

児童に文学を享受させることや、作品を享受できるように児童を教育するという点に児童文学の課題をみていたヴォルガストにとって、児童書の読書をめぐる状況は深刻だった。児童向けの著作は素材の新しさや刺激に訴えて児童の関心をかきたてようとするか、様々な傾向を子どもに植えつけようとするだけのように思われた。それでは文学作品を享受する能力は育成されないと危機意識をもったヴォルガストは、みずから積極的に良書を推薦する実践活動を行った。

(3) 良書の推薦の規準としてのカノン作成

上に見てきたように、彼は児童の享受能力の形成を阻害するような文学を娯楽文学や傾向文学といった俗悪文学と批判し、推薦に値する書物を雑誌『児童書の守護者』でリスト化したり、彼自身が編者となった『源泉』シリーズで具体的に示した。

このシリーズの大きな意義は、ヴォルガストや彼とともに活動した民衆学校教員たちが、当時通俗文学が氾濫していた市場に働きかけ、出版社の協力を得て、「良書」を大量に安く販売したことにある。

美的享受は、「真の文学」の読書によってこそ形成されるものと、ヴォルガストは考えた。それは「偽の文学」として批判された、上で見てきた俗悪文学とはどのように違う文学なのだろうか。

端的に言えば、まず「メルヘン、伝説、シュヴァンク、歴史的回想録、郷土誌など」[EJ: 269]が挙げられている。選ばれていたのは、子どものための韻をふんだ詩(キンダーライム)、グリムやハウフ、アンデルセンの童話(メルヘン)といった「国民」にふさわしいメルヘンのほか、故郷のメルヘン、地域の説話、ドイツの説話や民衆バラードなどである。また、ゲーテやシラー、ハイネの文学などの古典市民文学、そして、『ロビンソン物語』のような近

表3 ヴォルガスト編纂『源泉』シリーズ一覧
(1911年、『惨状』第4版背表紙より作成)

巻数	著者	書名	巻数	著者	書名
1	グリム	メルヒェン集1 (『笑いのメルヒェン』から)	16	—	小さい子どもたちのための動物詩集
2	グリム	メルヒェン集2 (『驚きのメルヒェン』から)	17	—	秘密の韻詩
3	グリム	ドイツの世話話	18	アレキサンダー・フォン・フンボルト	コロンナからクマーナへ
4	ルートヴィヒ・ウーラント カール・シムロック 翻訳	ニーベルンゲン	19	アドルフ・フリードリヒ	コンゴ横断
5	J. P. ヘーベル	滑稽譚	20	ハインリヒ・フォン・クラ イスト	公子フリードリヒ・フォン・ホンブルク
6	W. ハウフ	妖精のメルヒェン	21	フリッツ・ロイター	祈禱集
7	W. ハウフ	道徳的メルヒェン	22	—	ラッハステーレンの物語
8	グスタフ・シュヴァーブ	シルダの市民たち	23	スヴェン・ヘディン	アララトをめぐる
9	フリードリヒ・フォン・ ミュラー	1806-1813年の戦争時代からの思い出	24	ゲーテ	詩集
10	シラー	ヴィルヘルム・テル	25	ゲーテ	ゲーテの少年時代 (『詩と真実』から)
11	アンデルセン	メルヒェン集1 (『子どもと事物のメルヒェン』から)	26	グリム	メルヒェン集3
12	アンデルセン	メルヒェン集2 (『魂のメルヒェン』から)	27	—	大人のための動物詩集
13	—	ティル・オイゲンシュビーゲル	28	シャミッソー	ベーター・シュレミール
14	—	ゲーテの母による手紙	29	—	昔からの、美しい子どもたちのための韻詩集
15	ゲーテ	ヘルマンとドロテア	30	シラー	詩集

代物語文学である (実際に『源泉』シリーズで取り扱われた文芸作品については、表3を参照)。その他、彼はゾラの小説のような、一部のリアリズム文学も推薦している。具体的には以上のような作品を彼は子どもの文芸的 (美的) 享受能力を形成するような、「真の文学」と考えていた。これらの文学はヴォルガストに「国民文学」とも呼ばれている。これらの文学作品はどれも素材にのみ頼ることなく、素材をふさわしい形式に組み込むのに成功した作品であり、こうした国民文学を読むことによって享受能力が形成されることが望ましいとされていた。

そして、「国民文学」の読書による享受能力の形成にどのような意義があるかについて、ヴォルガストは「国民教育」との関連で次のように言っている。

「経済的問題のほかに、必ずしも経済的問題と並行してではないが、統一的な国民教育 (Volksbildung) の問題がある。教養人と教養のない人を区別し、豊かな人と貧しい人との間をしばしば切り離す、そうした断絶は、美的な心的態度によって制約されている。教養のない人に対する

教養のある人の長所は、道徳的な優越にあるのでも、必ずしも知性・知識の教育にあるのでもなく、常に、美的な心的態度にあるのだ。この態度は何はさておき、すべての他の芸術の教養要素を自己の内に統合する、文学教育によって引き起こされるのである。」 [EJ: 41]

従来、文学的教養は国民の一部のものにすぎず、教養の有無が国民を分断していたとヴォルガストはみている。しかし、彼は、従来そうした教養から排除されていた民衆学校の生徒に先にあげたような「望ましい文学」を与え、彼らに享受能力を育成することによってその分断状態を克服し、「国民」の形成に寄与できるのではないかと考えていた。

4.4. 「私的読書」の抑制 (Zurückdrängung)

世紀転換期ドイツの児童書の読書の「惨状」に危機意識をもったヴォルガストはみずから「良書」の規準を示しただけでなく、児童が素材のおもしろさにひかれたもっぱら通俗・娯楽文学に興ずることにならないよう実際の提言も行った。既に本稿の

4.3.にも引用したように、ヴォルガストが児童の読書から「駄作」や「傾向書」を締め出すべきであると述べた箇所があることから、彼の議論は当時も「抑圧的美学」[Zwangästhetik] [1899]と批判され、また、後の時代でも、先行研究において「過酷な禁止教育学の代表者」[Wilkending 2002: 59]などと批判されている。

しかし、こうした記述からヴォルガストの「禁止教育学」を批判するのはやや性急なのではないか。この問題に関し結論を急ぐ前に、ヴォルガストが前提していたドイツの「児童文学の惨状」と、彼の著作や活動の全体から見えてくる問題意識をはっきりとおさえておく必要がある。『惨状』のわずか二年後に発表された「私的読書」と題する比較的長い論文では、「禁止」といった強いことばは使われておらず、「私的読書」の「抑制」ということばが用いられている。彼の「私的読書」論は独特な議論である。「私的読書」とは、「読書の素材が、子どものまったくの任意によるか、あるいは両親の任意によって選ばれている」[PL: 10]読書のこと、つまり児童が自由に選択して行く読書のことである。ヴォルガストは、まだ享受能力の未熟な児童が自由に本を選択して読書することによって享受能力の形成が阻害されるのを問題視した。

そこで、彼が提案したのが「私的読書」抑制である。具体的には、12歳くらいに限って、子どもが自由に選択して読書することを抑制するということを主張した。

「この[文学の]選択を可能にし、自由な活動の分野を提供することが、私的読書の課題である。読物(Lektüre)の領域で自由な選択がいかに決定的であるかは、自伝に示された、多くの人々の自己形成の歴史(Bildungsgeschichte)が示している。」[PL: 10]

このように、ヴォルガストは、私的読書の自由が決定的なものであると理解していた。しかし、上で論じてきたような現実の子どもを取り巻く「悲惨な」環境の中では、読書教育の目的である享受能力の形成が健全に行われないことを考慮し、ヴォルガストは子どもが良書に出会う環境を作ることを最大の課題とした。そのために良書リストをつくり、それも禁止ではなく、良書リストの中では個々人の子ども

の自由な選択を尊重した。彼はこのように述べている。「良い趣味の範囲の中で、子どもは自分の流儀にしたがうべきである。」[EJ: 282]まだ素材的な関心しかもっていない子どもは、大人が選んだ「良い趣味」すなわち「真の文学」に囲まれ、その中で個々の関心にしたがうことで、享受能力形成の阻害要因から守られるのである。

また、彼は人間の成長の中で読書の芸術的享受をとらえる視点をもっていた。彼は私的読書の抑制は12歳までであると明確に述べている。それは、享受能力の形成には人間の成長段階に応じた配慮が必要であると児童保護の考えのもとで、人間の成長段階において特に良書に触れる環境を作るべき読書の在り方を重視していたためである。

「さて、児童の文学書が芸術作品でなければならぬという周知の原則を根拠に、教育学は、児童書とその読物に対し、どのような要求をするのだろうか？教育はまず最初に子どもの未発達な状態を考慮に入れなければならなかった。大人より小さい認識能力や発達の遅れた感情生活、大人より弱い意志が、子どもを大人から区別する。この事実が、子どもの私的読物の選択の際、学校の教本の編成の際よりさらにもっと入念に顧慮されねばならない。」[EJ: 32、強調はヴォルガスト]

子どもの能力が発展途上にあることに配慮することが、読書教育においても必要であるとヴォルガストは考えている。そのため、私的読書においても素材の選択に教員や親が配慮することが必要になる。12歳とあるのは、子どもが比喩的な表現を評価し、抽象的な概念を理解することができる——つまり、ある程度の享受能力が形成されるのが12歳頃だと考えたためである¹⁸⁾。彼はこのように述べている。「読書は第一に、子どもが比喩的な(uneigentlich)表現を評価し、抽象的な概念を理解することができるところから始まるべきである。それはたとえばほぼ12歳くらいの場合であろう。」[EJ: 244]。

以上のように、ヴォルガストの「私的読書」の抑制論を、彼の読書能力の発達論と統合的に理解することがきわめて重要な意味をもつことになる。

5. おわりに

本稿では、世紀転換期のドイツにおいて子どもの読書機会が飛躍的に増大したにもかかわらず、出版産業の思惑が大きな影響を与え、子どもたちが望ましくない読書に夢中になっている状況を指摘し、そうした状況への危機意識をもったヴォルガストが、子どもたちの文学作品の享受能力の育成を重視し、そのために提案した「私的読書の抑制」が、研究史でしばしば言われるような「抑圧的」性格のもではないことを検討した。

もちろん4.4.でもふれたように、ヴォルガストの読書教育論全体についてみれば、ヴォルガストの議論はいまだに論争の的となっており、先行研究でもまだとらえきれていないところがあるように思われる。先にも述べたとおり、ヴォルガストの読書教育論はドイツの国語教育、読書教育に大きな影響を及ぼしたものの、当時から批判され、とりわけ70年代以後は近代批判の潮流の中で、否定的評価が主流となっていった。ヴォルガストに対する批判がどのようなものであり、それに対する彼の反論がいかなるものであったかについては別稿で論じたい。

文献

ヴォルガストの著作

- Wolgast, Heinrich. [1911]: *Das Elend unserer Jugendliteratur. Ein Beitrag zur künstlerischen Erziehung der Jugend*, Ernst Wunderlich, Leipzig. (org. 1896)
- [1898]: Privatlektüre. In: W. Rein(Hrsg.): *Encyclopädisches Handbuch der Pädagogik*. Bd. 6, Beyer, Langensalza. S.342-355.
- [1903]: *Die Bedeutung der Kunst für die Erziehung*, Verlag von Ernst Wunderlich.
- [1906]: *Vom Kinderbuch. Gesammelte Aufsätze von Heinrich Wolgast*, Verlag von B. G. Teubner, Leipzig und Berlin.
- [1910]: *Ganze Menschen*, Verlag von Ernst Wunderlich, Leipzig.

研究文献

- 遠藤孝夫 [1996]: 『近代ドイツ公教育体制の再編過程』、創文社。

- 岡本定男 [1985]: 「ドイツ芸術教育運動の成立」、リヒトヴァルク、アルフレッド著、岡本定男訳・解説『芸術教育と学校』所収、明治図書。
- 小峰総一郎 [2002]: 『ベルリン新教育の研究』、風間書房。
- 鈴木幹雄 [2001]: 『ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動から初期G・オットーの芸術教育学へ—』、風間書房。
- 佐々木秀一・白根孝之 [1936]: 『最近ドイツ教育思想史』、中和書院。
- 関衛 [1925]: 『芸術教育思想史』、厚生閣。
- テノルト, H-E. 小笠原道雄、坂越正樹監訳 [1998]: 『教育における「近代」問題』、玉川大学出版部。
- 望田幸男 [1997]: 「ヴィルヘルム時代」、『世界歴史大系 ドイツ史 3—1890年～現在—』、山川出版社所収。
- Fiege, Hartwig. [1970]: *Geschichte der hamburgischen Volksschule*, Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn/OBB. Verlag Erziehung und Wissenschaft, Hamburg.
- エンゲルジグ, ロルフ. 中川勇治訳 [1985]: 『文盲と読書の社会史』、思索社。
- グレンツ, ダグマル. 中村元保・渡邊洋子訳 [2005]: 『少女文学』、同学社。(Grenz, Dagmar. [1981]: *Mädchenliteratur.; Von den moralische-belehrenden Schriften im 18. Jahrhundert bis zur Herausbildung der Backfischliteratur im 19. Jahrhundert*, J.B. Metzlersche verlagsbuchhandlung Stuttgart.)
- ヒューリマン, ベッティーナ. 野村滋訳 [2003]: 『ヨーロッパの子どもの本』上・下。ちくま学芸文庫。
- Brüggemann, Theodor. [1976 (1962)]: Grundideen der Literaturpädagogik von 1900 bis heute. In: Harro Müller-Michaels.(Hrsg.) *Literarische Bildung und Erziehung*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1976, S. 69-102. (org. 1962)
- Dahrendorf, Malte. [1980]: *Kinder- und Jugendliteratur im bürgerlichen Zeitalter*, Scriptor Verlag GmbH.
- Dolle-Weinkauff, Bernd., Ewers, Hans-Heino.(Hrsg.). [1996]: *Theorien der Jugendlektüre. Beiträge zur Kinder- und Jugendliteraturkritik seit Heinrich Wolgast*, Juventa Verlag, Weinheim und München.
- Jenkins, Jennifer. [2003]: *Provincial Modernity*. Cornell University Press.
- G. Schönfeld: Pädagogische Reform- Literatur. In: *Die Neue Zeit* 16,1(1898), S. 612ff.
- Schambach, Sigrid. [2004]: *Aus der Gegenwart die Zukunft gewinnen. Die Geschichte der Patriotischen*

Gesellschaft von 1765.

- Wilkending, Gisela. [1979]: Heinrich Joachim Wolgast. In: *Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur*, Hg. von Klaus Doderer, Bd.3, Weinheim, S.825-827.
- [1980]: *Volksbildung und Pädagogik “vom Kinde aus”*. Eine Untersuchung zur Geschichte der Literaturpädagogik in den Anfängen der Kunsterziehungsbewegung, Beltz Verlag, Weinheim und Basel.
- [2001]: Die Kommerzialisierung der Jugendliteratur. In: Kaspar Maase und Wolfgang Kaschuba (Hrsg.). *Schund und Schönheit*, Böhlau Verlag, Weimar, S. 218-251.
- [2002]: Das Mädchen als Subjekt der Lektüre und als Objekt pädagogischer Einwirkung. Zur pädagogischen Kritik des Mädchenlesens der Kaiserzeit. In: Groeben, Norbert.(Hrsg.). *Medienkompetenz*. Juventa, Weinheim und München, S. 44-70.
- [1899]: *Erwiderung der Hamburger Jugendschriften-Ausschusses auf die Denkschrift der Jugendschriften-Kommission der Patriotischen Gesellschaft.*

注

* 本稿では「世紀転換期」を19世紀から20世紀への転換期の意味で用いる。

- 1) ヴォルガストの著作は、本稿末尾の「文献」リストにある通りである。『惨状』は出版直後から広く注目され、生前に第5版まで出版された。本論文では、第4版にあたる1911年版を用いることにしたい。その理由は、以下の通りである。
- ①1911年版から、最終章である第7章の後に、『惨状』に対する批判に答える内容の「付録」〔Anhang〕が追加されている。この「付録」は、1896年初版出版後の、世紀転換期の児童書をめぐる議論を理解するうえで重要である。なお、「付録」は1950年版では編者によって「第8章」として収録されている。
- ②『惨状』1911年版において、1896年版に見られた古い表記を改めたり、死亡者の情報を追加したりするといった変更箇所はあるものの、基本的な記述や内容は変更されていない。
- 以上二点から、1896年版の出版時の内容に変化がなく、そのインパクトを損っていないだけでなく、さらに、反響を受けて反論を含め改めてヴォルガストが自らの考えをまとめた議論が終章に追加されている1911年版

を、本論文では用いる。

特に頻繁に引用・参照した著書は以下の略号で表記する。

EJ=Wolgast, Heinrich. [1911 (1896)]: *Das Elend unserer Jugendliteratur.*

VK=Wolgast, Heinrich. [1906]: *Vom Kinderbuch.*

PL=Wolgast, Heinrich. [1898]: Privatlektüre. In: W. Rein (Hrsg.): *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, Bd. 6.

- 2) 日本における先行研究として、近年では岡本 [1985]、鈴木 [2001]、小峰 [2002] などがある。岡本は、ヴォルガストを芸術教育運動の主たる担い手の一人として取り上げている。鈴木と小峰は、ヴォルガストのハンブルク民衆学校代表としての実験学校設立要求の活動を挙げ、民衆学校教師陣の指導者としての側面を取り上げている。1920年代、30年代頃の文献（佐々木・白根 [1936]、関 [1925]）では、ヴォルガストの芸術教育が芸術教育運動の中で、美的教育の主張から教材の選択を論じた点を紹介している。
- 3) 関連文献として、テノルト [1998]、遠藤 [1996] などがある。
- 4) ヴィルケンディングによれば、1840年以来、マスコミュニケーションの近代的システムへの形成過程が、児童文学の書籍市場参入によって新たな局面に入り、より安価な児童文学が市場に出回ることになった〔Wilkending 2001 : 223, 224〕。そして、1890年以後、通俗文学の大きな出版社の中で児童文学へ特化するものが現れたこと、そして、三文文学に特化した通俗書籍商が確立したことが、世紀転換期における児童文学の状況変化の重要な点である、という〔Wilkending 2001 : 225〕。
- 5) 小娘文学とは、クレメンティーヌ・ヘルム (Clementine Helm, 1825-1896) の『小娘ちゃんの悲しみと喜び』 (1863) [“*Backfischchens Leiden und Freuden. Eine Erzählung für junge Mädchen*”] やエミー・フォン・ローテン (Emmy von Rhoden, 1829-1885) の『片意地娘』 (=『イルゼの結婚』 (1883) [“*Der Trotzkopf*”]) などがベストセラーになった、結婚前の少女を主人公とし、また、同世代の少女を読者として想定された、道徳的教訓的な文学を指す。ヴィルケンディングによれば、19世紀末期と20世紀初頭において、12歳から15、6歳までのほとんどすべての女性読者に極端に好まれた〔Wilkending 2002 : 48〕。少女文学、小娘文学についてはグレンツ [2005 (1981)] を参照。
- 6) インディアン物語とは、クーバーの小説『革脚絆物語』

- や『鹿殺し』を原型とするような、インディアンと白人の戦いの、あるいは友情の物語を指す。ヒューリマンによれば、ドイツはインディアン物語への関心が強く、クーパーの通俗化が最も盛んに行われ、当時主として少年たちに好んで読まれた。その代表的作家がカール・マイ(1842-1912)である[ヒューリマン 2003:191ff.]。ヴォルガストは『惨状』の中でマイを批判的に検討している[EJ: 178ff.]。
- 7) これらの書籍生産量と読者数については、エンゲルジック[1985]の207-214頁を筆者が整理したものである。
- 8) ヘルムの著作『四つ葉のクローバー』[“*Das vierblättrige Kleeblatt*”]出版の際の契約によれば、版ごとに3500部出版され、ヘルムは、第一刷で少なくとも1500マルク、そして増刷ごとに1200マルクを得ていた[Wilkending 2001:224]。
- 9) 愛国協会とは、ハンブルクで1765年に設立された団体である。当時、ハンブルクにおいて、文化、文学などの分野においても非常に強い影響力をもっていた。関連文献として Jenkins [2003] や Schambach [2004] などがある。
- 10) ヴォルガストは教員養成学校を「政治的信念ゆえに」追放されたと言われている[Wilkending 1979:825]が、その詳しい理由は不明である。ヴォルガストはたびたび社会民主党とつながりがあると批判され、党员であると疑われていた[Wilkending 2001:236]が、実際にどうであったのかは現在の時点で確認できていない。
- 11) ヴォルガストは、ハンブルク民衆学校教員組合(Verein hamburger Volksschullehrer) (1873年結成、以下VHVと略記する)の幹部を務め、後に、ハンブルクの「祖国の学校制度および教育制度友の会」の様々な委員会に所属していた。「芸術教育促進教員連盟」[Lehrervereins zur Pflege der künstlerischen Bildung]の「文学委員会」の議長にもなっている[Fiege 1970:65]。 (“Lehrervereins zur Pflege der künstlerischen Bildung”の訳語には、「芸術教育保護のための教員集会」[鈴木 2001]、「学校における芸術教育促進教員連盟」[岡本 1985]などがある。本稿では、「芸術教育促進教員連盟」とする。)
- 12) 『守護者』は、当時、児童書運動の最も重要な批評、議論の場となった。[Wilkending 2001:220]
- 13) 『源泉』シリーズの出版は、ヴォルガストや、ハンブルク教員組合で設立された検査委員会の重要な活動と位置づけられる。そのほかにも、彼らは「ドイツ児童書シリーズ」[Deutsche Jugendbücherei]といった、一連の安価な図書を出版させることに成功した[Fronemann 1927:4, 5]。『源泉』シリーズは、ゲーテ、シラー、シュトルム、ハウフといった作家の作品や、地域の伝説、グリムやアンデルセンの童話などをとりあげ(表3を参照)、0.25マルクで販売され、ヴォルガスト没後も継続して90を超える作品が出版された。検査委員会が始めた『ドイツ児童書シリーズ』は、『源泉』シリーズよりも安い0.10マルクで販売され、こちらは古典作品を集めた『源泉』シリーズとは異なり、当時の比較的新しい文学作品も収められた[Fiege 1970:70, 71]。そのほかに、ヴォルガストには、ハンブルクの読本制作(共作)の実績もある。
- 14) 安価に古典作品を出版し、子どもの手に渡るようにしたいというヴォルガストの意欲は大きく、『昔からの、美しい子どものための韻詩集』[Schöne alte Kinderreime]を彼は自費出版で10万部出版し、0.15マルクで販売した[Fiege 1970:70]。
- 15) 読書熱とは、読書への過度の熱狂を指す。読書中毒、読書欲求もほぼ同じ意味で用いられていた。読書熱が現実的感覚を失わせ、身体健康まで害するという批判は、18世紀以後、19世紀後半まで繰り返行われていた[Wilkending 2001:227]。ヴォルガストが好んで例に挙げる、ゴットフリート・ケラーの小説『緑のハイネリヒ』の登場人物は、そのように身の破滅をもたらした人物の一人である[ケラー 1936:120-130]。
- 16) フランツ・ホフマン(Franz Hoffmann, 1804-1882)とグスタフ・ニーリッツ(Karl Gustav Nieritz, 1795-1876)。
- 17) ヴォルガストは道徳的傾向文学を批判したが、子どもにとって道徳が重要でないと考えていたわけではなかった。また、公教育において道徳教育の重要性も認識しており、「教訓と洗練あるいは科学と道徳心はすべての公教育の中心点でもある。読書の授業と読書によって子どもを時分で本から教訓と改善を手に入れることができるようにするのは、今日確かに追求するに値する目標である」[EJ: 20]と述べている。このように、彼は読書による道徳教育の可能性を認めている。この点については別稿で論じたい。
- 18) ヴォルガストは、児童が享受能力を形成したと想定される12歳以後、とりわけ民衆学校終了後の青少年の読書についても議論している。ヴォルガストによれば、民衆学校では、大人になっても継続して読み続けられるような文学の読書への接続を「準備」することはできる

が、直接に「仲介」することはできない [VK: 95]。そのため、学校を卒業したあとの青少年の読書のために公共図書館が必要であると主張したことに見られるように [VK: 93ff.]、ヴォルガストは、享受能力の形成を

読書教育の理論として観念的に提起したのではなく、具体的に時代状況に実践的に対応し、理論を形成したと言えるだろう。